

## ストラスブール図書館案内

金沢 英之 (文化学部准教授)

私がいま留学に来ているストラスブールは、フランス東部、ドイツとの国境であるライン川に近い、アルザス地方の街です。アルザスという土地は、ドイツとフランスとの境に位置するだけでなく、南はスイスに接し、アルプスを越えてイタリアへ、また北はライン川を下りオランダを通過して北海へとつながる、ヨーロッパの大動脈ともいべきルート的重要として栄えてきた場所です。なかでもストラスブールは、古くからこの地域の文化的・商業的中心地のひとつとして発達した街で、旧市街には中世以来の街並みが今も保存されています。とくにゴシック様式のカテドラルの美しさは、21歳でこの地を留学に訪れたゲーテを感動させたのは有名な話、かのゲーテンベルクもこの街に10年間ほど滞在し、活字印刷技術の研究を重ねました。もともと本にはゆかりの深い街でもあったわけです。

さて、私の留学先であるストラスブール大学は、設立以来400年近くの歴史を持つ総合大学で、医学・自然科学系、法学系、そして人文・社会科学系の三つの大学に分かれています。そのうち、私の留学中の所属先は、人文・社会科学系のマルク・ブロック大学、そのなかの日本学科というところ。

近年、マンガやアニメの人気も手伝って、日本学科を志望する学生は多いらしく、毎年80人ほどの新入生が入学してくると聞きました。フランスでは、大学はほとんどが国立で、高校卒業時に受ける共通試験に合格してさえいれば、どこでも希望する大学へ入学することができます。その代わり入ってからの授業は厳しく、日本学科でも三年生に上がる頃には、人数は半分くらいに減っているそうです。しかし、そうした過程をくぐりぬけて、大学院まで残るような学生はやはりレベルが高く、私もいま博士課程の学生と一緒に江戸時代の文献を読んでいます。この数ヶ月で、

くずし字で書かれた写本もかなり読みこなせるようになってきました。

そんな日本学科の学生が利用する図書館はいくつかあります。まず、キャンパスには法学および人文・社会系学部共通の図書館があります。閲覧室は全面ガラス張りの、明るい図書館ですが、バカンスを大事にするフランスらしく、七月八月はしっかり休館になっています。一方、大学地区のはずれには、19世紀の建物を利用した大きな公立図書館があり、蔵書数も豊富で充実しています。こちらは夏休みでも開いています。ただし、以上の図書館には、日本に関するフランス語の本はあっても、当然ながら日本語の本は所蔵されていません。代わりに、日本学科には付属の図書室があり、そこで日本語の資料を閲覧することができます。さらに、ストラスブールから車、または電車とバスで約一時間と少々時間はかかるのですが、南のキエンツハイムという町には、アルザス・欧州日本学研究所(CEEJA)という機関があり、三万冊の日本語図書を蔵する図書館を備えています。古典文学全集や各種辞典類も一通り揃っているのも、こちらで調べ物が必要な際などなにかと重宝します。図書は貸し出しも可能です。また、ここには宿泊施設や食堂も付属していて、世界中から日本絵研究を行う研究者を受け入れています。周りには小さな町しかありませんが、静かで集中できますので、夏休みにでもじっくりと研究を行いたい人にはおすすめです。CEEJAは一般市民に対する講演会や展示会も頻繁に行っており、私も秋に「古事記」についての話をする予定です。

この他にも、この留学中に実際に見聞したストラスブールやアルザスの街を、ブログで紹介していますので、興味のある方はあわせてご覧ください。

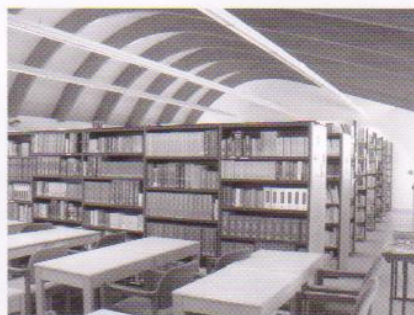
<http://strassbourg.seesaa.net/>



ストラスブール大学の図書館



公立図書館



アルザス・欧州日本学研究所付属の図書館